

スタインベックの「怒りの葡萄」という作品は、1930年代のアメリカの不況が舞台です。農民たちは生産物を奪われ、血と汗で開墾した畑を手放さなければなりませんでした。オクラホマにいたジョード一家もブドウ園の労働者募集のビラを見て、はるばるカリフォルニアにやって来たのに一日働いても1回の食事代にもならない安い労賃で働かされることになったのです。需要と供給の関係で、賃金は安く抑えられ神様が与えてくださった豊かな大地に実を結んだのは決して許すことのできない怒りの葡萄でした。

今朝の聖書の記事もブドウ園の労働者の譬えです。ブドウ園の主人は朝早く夜明けとともに出かけて行って広場に集まっている労働者を1日1デナリオンで雇いました。9時ごろ、12時ごろ、3時ごろにも雇いました。夕方5時ごろにも何もしないで広場にいる人を見かけ雇いました。賃金を払う時、5時に雇われた人に1デナリオン、朝から働いた人にも1デナリオン支払いました。その人が「不公平だ」と文句を言うと、ブドウ園の主人は「あなたと1デナリオンの約束をしたではないか。私は、この最後の者にもあなたと同じように払ってやりたいのだ」と言ったのです。

このイエス様の譬え話を全日本金属産業労働組合協議会のリーダーシップ・トレーニング・プログラムで紹介しました。スタインベックの「怒りの葡萄」のように需要と供給だけで賃金が変わっては生活出来ないが夕方5時に来た人も朝から働いた人も同じ給料だというのは賛成できないという反応でした。そこで美味しそうなパンを見せて、これを4人で公平に分けるにはどう切れば良いか？と問題提起しました。一口で「公平」と言っても、数や大きさだけでは公平にならない場合があるという実験でした。

私達は資本主義社会に生きていて、需要と供給で賃金が決まることが公平で当然のことだと考えています。しかし、それでは能力主義や成果主義や実労主義で格差や差別を公平なことだと認めることになります。自分が若くて元気で能力も資格もあって、存分に働けるときはこれこそ公平だと思って気持ちが良いかもしれませんが、体力が落ち、資格もなくなり、労働の成果も努力の割には出せなくなった時、自分の人生は幸せだと思えるのでしょうか。イエス様が話された「ブドウ園の労働者」の譬えは、一見不公平に見えますが、私たちの社会の現実と照らし合わせてみると大きな問題提起をしています。